

第2章 瑞浪市の概要

第1節 地理的環境

瑞浪市は岐阜県美濃地方の東部、東濃地方のほぼ中央に位置し、東は権現山（595m）や屏風山（794m）などの丘陵を境として恵那市と、西は土岐市・可児郡御嵩町と接しています。また、南は丘陵地帯を境として愛知県豊田市（旧西加茂郡小原村）、北は木曽川の溪谷を隔てて加茂郡八百津町に接しています。

瑞浪市の面積は約 175k m²（東西 14.3km、南北 20.7km）で、そのうち約7割が東濃丘陵と称される丘陵で形成され、丘陵は市の北西部及び南東部に発達しています。市域の北東から西に流れる土岐川（庄内川）と、その支流によって形成された沖積地や河岸段丘を中心として市街地が形成され、主要交通路である国道 19 号や中央自動車道、JR 中央線なども土岐川に沿って敷設されています。



図 2-1 瑞浪市位置図



写真 2-1 瑞浪市市街地

第2節 自然的環境

瑞浪市の気象は比較的温暖で、年間の平均気温は 15.6℃程度（令和元年：1 月平均気温は 1.8℃、8 月平均気温は 28.8℃）、年間降水量は概ね 1,630mm です。

市の北東部に位置する釜戸町にはハナノキ（ハナカエデ）とヒトツバタゴの自生地が所在しており、国の天然記念物に指定されています。また、大湫町にもヒトツバタゴの自生地がみられ県の天然記念物に指定されているほか、文化財には指定されていませんがシデコブシなどの貴重な植物の自生地も確認されています。さらに瑞浪市内には国の特別天然記念物に指定されているカモシカが生息し、土岐川には国の天然記念物に指定されているネコギギ、オオサンショウウオ等の貴重な生物の生息も確認されています。

また、瑞浪市の地質は土岐花崗岩・濃飛流紋岩から成る火成岩類、粘板岩・チャート・砂岩から成る中生代の地層を基盤とし、丘陵地は瑞浪層群（1900～700 万年前）・瀬戸層群（700～200 万年前）から成る第三紀層、河川周辺やその両岸の平地などは礫・砂・粘土から成る第四紀層で形成されています。

市内北部（日吉町・釜戸町）には大規模な花崗岩の露頭がみられ、中でも日吉町松野から西接する御嵩町にかけて所在する露頭は「鬼岩」と呼ばれて特に規模が大きく、国の名勝および天然記念物に指定されています。



写真 2-2 ヒツバタゴ自生地



写真 2-3 鬼岩

また、瑞浪層群は厚さ約 600mを測り、デスモチルスやパレオパラドキシア、ビカリアといった貴重な化石のほか亜炭やウランを含んでいます。瀬戸層群は陶土（土岐口陶土層）を含み、東濃地方有数の産業である窯業の原料として古くから利用されてきました。また、第四紀層はコハクや昆虫の化石を若干含み、明世町を中心とした区域におけるこれらの地層には特に多くの動植物化石が含まれ、「明世化石（県指定）」・「瑞浪化石産地（市指定）」として天然記念物に指定されています。

第3節 歴史的環境

市域ではこれまでに旧石器時代の遺跡は確認されていませんが、釜戸町や土岐町など段丘や丘陵上に縄文時代の遺跡が複数確認されています。また、弥生時代・古墳時代の遺跡（集落遺跡）は極めて少数ですが、明世町戸狩に所在する岐阜県史跡「戸狩荒神塚古墳」は古墳時代中期の築造とみられる県内最大級の円墳で、古墳時代後期になると多くの古墳（群集墳）が築造されるようになります。7世紀後半までに土岐川沿いの北部丘陵部を中心として円墳約 130 基が築造され、土岐郡（註1）内でもその数は最多とされます。さらに当市においては横穴墓が多数（約 60 基）築造されていることも大きな特徴であり、上述した戸狩荒神塚古墳北側の丘陵に所在する「戸狩横穴墓群」（13 基）は岐阜県史跡に指定されています。

奈良時代に主要な幹線道路である東山道（古代東山道）（註2）が整備される中、美濃国内には8つの駅（駅家）が設置されました。このうち瑞浪市内には土岐駅が設置されたと考えられており、当地が交通の要所であったことを窺うことができます。

鎌倉時代になると源光衡が土岐町の一日市場に館を構えて「土岐」を称したとされ、現在でも土岐町地内には岐阜県史跡「土岐頼貞墓」をはじめとして、土岐氏にまつわる史跡が数多く残されています。光衡の曾孫である土岐頼貞は足利尊氏と共に各地を転戦し、その戦功により室町幕府の初代美濃国守護に任じられ、これ以後、土岐頼芸が斎藤道三によって国を追われるまで、土岐氏は約 200 年間に渡り美濃国守護を務めました。また、頼貞の子・頼遠の時代には、その拠点を現在の岐阜市に移したとされますが、この頃には東海地方一円にも一族が土着し、市内に土着した一族は小里（尾里）、萩原、猿子、市原氏などを称しました。

鎌倉時代には幕府によって主要街道の整備が行われたとされ、当該期の東山道は中世東山

道(註3)と呼ばれます。その詳細なルートについては明らかとなっていませんが、江戸時代に記された『美濃御坂越記』(註4)の記載や、周辺に残る「宿」の地名(註5)などから、およそのルート(図1-3)が推定されています。

戦国時代には戦乱の余波を受け、市内各所にも城館が築かれ、岐阜県の史跡に指定されている「鶴ヶ城跡(神籠城跡)」・「小里城跡」はいずれも土岐氏、あるいはその一族の居城とされています。天正年間には織田信長によって改修工事が行われたとされ、織田信長の東濃支配に重要な役割を果たしました。また、戦国時代末期からの茶の湯の流行により、当市の南部に位置する陶町にも大川窯・田ノ尻窯・猿爪窯など多くの窯が築られました。



写真 2-4 鶴ヶ城跡(神籠城跡)



写真 2-5 小里城跡(大手門跡)

江戸時代の瑞浪市は、幕府の分知政策によって山村氏(3氏)、千村氏(4氏)、馬場氏、原氏、三尾氏、遠山氏、松平氏、小里氏の13領主により治められ、このうち市内に居館を置いたのは小里氏(稲津町小里)と馬場氏(釜戸町)でした。元和元年(1615)には木曾衆の山村氏、同3年(1617)には千村氏が尾張藩に付属させられ、同9年(1623)の**小里氏の断家などにより**、市内は幕府代官、尾張藩(千村・山村)、岩村藩に加え、旗本の遠山明知と馬場の5領主によって治められることとなりました。

また、江戸時代初頭にはそれまでの中世東山道とは異なる道筋で中山道が整備され、新たな宿場として大湫宿(大湫町)と細久手宿(日吉町)が設置されました。このように、当市の中山道の大きな特徴は、それ以前の主要道路であった中世東山道とは異なるルートを通る点にあり、**より直線的なルートに変更されたと言えます。**

新たに中山道が整備された目的や時期を示す記録は未だ確認されていませんが、大湫宿の本陣を務めた保々氏の由緒書である「大湫宿本陣由緒書上」には、天正元年(1573)から大湫の開拓が始まったことが記されています。恐らく当初から宿場を設置する目的で開拓を始めたものと考えられ、中山道ルートの整備が戦国時代末期に始められた可能性を示しています。また、当地は永禄8年(1565)頃から織田信長の影響下にあり、信長は軍勢をいち早く京都に到着させるために近江国でも摺針峠を開削して中山道の新道(バイパス)をつくるなどしていた(註6)ことから、中山道も信長が軍事道路として使用するためにルートを変更した可能性が考えられます。

当時の主要街道である中山道が開通したことによって当該地は東西の文化が交流する場となりました。日吉町半原地区に伝わる半原操り人形浄瑠璃は宝永・正徳年間(1704~1715年)頃に淡路の人形遣いから伝えられたといわれ、同じく日吉町に伝わる地歌舞伎(地芝居)や

獅子舞なども中山道における人々の活発な往来によってもたらされた文化とみられます。なお、当市には他にも主要な街道として下街道と中馬街道があり、下街道は現在の国道 19 号線や JR 中央本線のルート、中馬街道は現在の国道 363 号ルートにあたります。

明治 4 年(1871)の廃藩置県により、市内は一部を除いて岐阜県に組み込まれ、同 5 年(1872)には全域が岐阜県に組み込まれるなど、行政システムでは様々な改革がなされましたが、中山道は明治 6 年(1873)の河港道路修築規則(大蔵省達)により一等道路に、同 9 年(1876)の太政官達第 60 号により国道一等に定められるなど、依然として主要な交通路でした。また、明治 5 年(1872)に宿駅制度が廃止されると各宿場は陸運会社として営利運営されることとなり、制度の変更を伴いながらも明治 20 年(1887)まで運営が続いたとされます。

この間の明治 6 年(1873)には下街道の輸送も正式に認められ、それ以降は中山道と下街道の双方が郵便・輸送を中心とする道路となりましたが、明治 13 年(1880)に明治天皇の巡幸に伴って下街道の改修工事が行われると交通の主要ルートは次第に下街道へと移り、明治 14 年(1881)の「新中街道」(＝中世東山道ルート)の改修工事によって、大湫・細久手両宿の賑わいは次第に失われていきました。さらに、明治 33 年(1900)に名古屋―多治見間で開通した鉄道(中央線)が同 35(1902)年に中津町(現在の中津川市)まで開通すると、市内には瑞浪駅と釜戸駅が設置されました。瑞浪駅周辺では急速に都市化が始まり、これ以降の交通ルートは鉄道の駅を中心としたものへと移行していきました。

一方、瑞浪市南部の陶町では明治時代から磁器生産が盛んとなり、特に明治時代後半からは輸出用洋食器の一大産地へ発展しました。また、大正時代以降は瑞浪駅周辺に陶磁器製造・販売業者が集積するようになり、製品は鉄道などによって主に名古屋方面に販売されました。そして昭和 26 年(1951)、土岐郡瑞浪町は同郡土岐町と合併して瑞浪土岐町となり、同 29 年(1954)には土岐郡瑞浪土岐町・同郡稲津村・同郡釜戸村・同郡大湫村・同郡日吉村・同郡明世村、恵那郡陶町が合併し、現在の「瑞浪市」が誕生しました。



写真 2-6 美濃の陶磁器生産用具及び製品(1)



写真 2-7 美濃の陶磁器生産用具及び製品(2)

昭和 20 年代以降、市の主要産業は陶磁器や耐火物の製造、およびその原料生産などの窯業関連産業という状態が続き、特に陶町では複数の企業が日本を代表する洋食器メーカーに成長して、瑞浪市の発展を支えましたが、昭和 50 年代以降になると人件費の高騰などの要因により、次第に生産業者数は減少に転じました。

この間、昭和 42 年(1967)に着工した中央自動車道が、昭和 48 年(1973)に多治見―瑞浪間で開通するなど、市内各地で開発が相次ぐとともに人口も増加しました。

第4節 社会的環境（瑞浪市の現況）

（1）人口構造等

市の総人口は 37,018 人（令和 2 年 10 月 1 日現在）です。国勢調査等の結果で、昭和 60 年（1985）以降の人口推移を見ると、平成 12 年（2000）以降は減少に転じています。

また、年少人口（0～14 歳）、生産年齢人口（15～64 歳）、高齢者人口（65 歳以上）の年齢 3 区分別に見ると、年少人口と生産年齢人口は減少する一方、高齢者人口は増加しています。

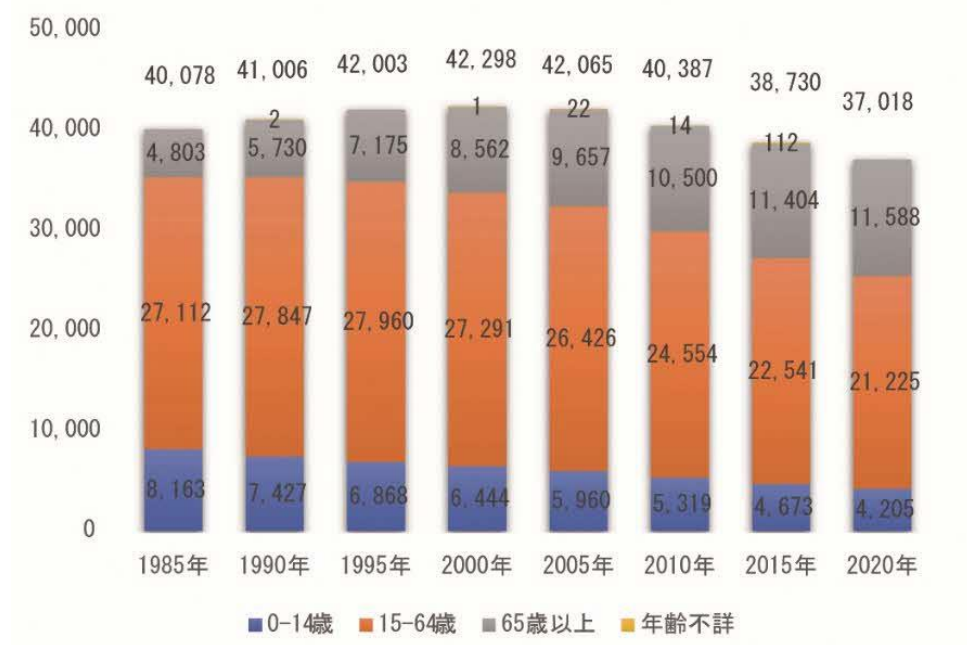


図 2-2 人口推移図

【資料：国勢調査】

※2020 年は市統計データを使用。

（2）土地利用

瑞浪市の土地利用の状況を見てみると、約 7 割が森林であり、市の土地利用の特徴となっています。平成 20 年（2008）令和元年（2019）を比較しても大きな変化はありませんが、森林割合増と農地割減少には耕作放棄地等の影響、宅地の割合減には人口減少が影響している可能性が想定されます。

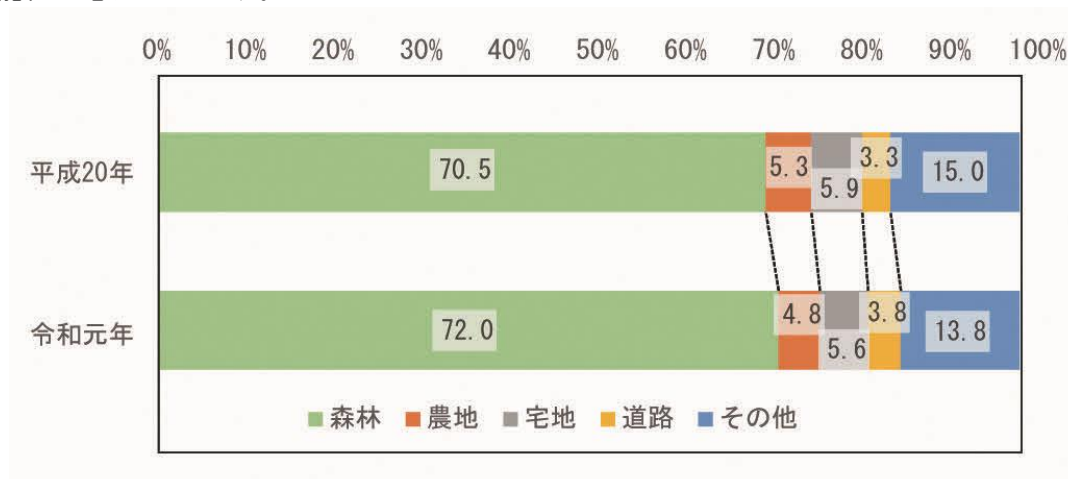


図 2-3 土地利用状況推移図

【資料：瑞浪市統計書】

(3) 産業

平成 29 年（2017）の市内総生産は約 1153 億 1000 万円で、市内総生産の経済活動別構成比で産業構造みると、製造業が 20%以上を占めています。産業 3 部門別にみると、第 1 次産業が 1.9%、第 2 次産業が 30.6%、第 3 次産業が 67%となっています。

約 10 年前（平成 18 年）と比較すると、製造業、不動産業、保健衛生・社会事業が増加している他は、概ね 1 %程度の変化となっています。

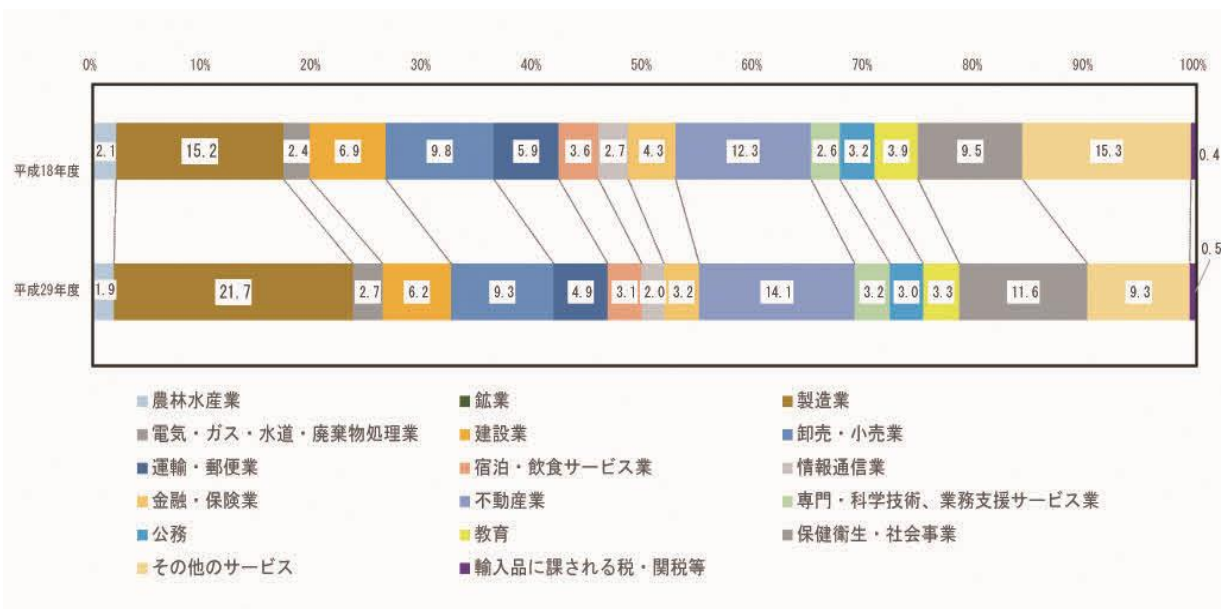


図 2-4 経済活動別構成比

【資料：平成 29 年度市町村民経済計算結果】

(4) 観光

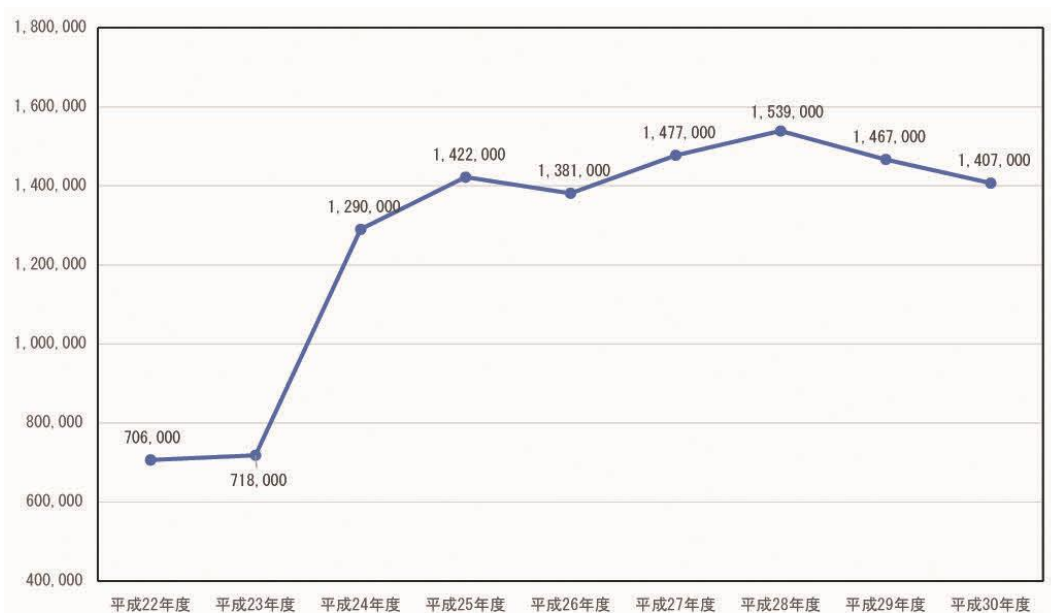


図 2-5 観光客数推移図

【資料：瑞浪市統計書】

※平成 22-23 年度は鬼岩公園・七夕まつり・ゴルフ場のみの数値

※平成 24 年度から中山道・きなあつ瑞浪等の追加のため数値が上昇

瑞浪市は「化石のまち」として知られているほか、13のゴルフ場を有することから近年は「ゴルフのまち」としても知られています。また、日吉町には国名勝および天然記念物「鬼岩」（鬼岩公園）、釜戸町には竜吟の森（自然ふれあい館）など当地の自然環境を活かした観光資源もみられます。

さらに、平成24年（2012）には土岐町に瑞浪市農産物等直売所「きなあた瑞浪」、平成29年（2017）には大湫町に中山道観光案内所「丸森」を開設するなど、近年は観光振興に力を注いでいます。

（５）史跡へのアクセス

当市の中山道への来訪手段は徒歩、自動車、鉄道のいずれかと考えられますが、公共交通機関（鉄道）で来訪した場合は駅から中山道まで長距離を移動する必要があり、その概要を以下に図示します。



図 2-6 瑞浪駅・釜戸駅からのアクセスマップ

※バス停、バスルートは瑞浪市コミュニティバスのもの

以下に市内の2駅からの移動手段および移動距離などを示します。なお、距離及び移動時間は県域統合型GISのルート検索によるもので、バスルートやバス停の位置・名称、また宿泊施設による送迎サービスの有無等は令和4年3月現在の情報です。

◎JR瑞浪駅

【大湫まで距離：約11.6km、移動時間：自動車約23分、徒歩約2時間55分】

【細久手まで距離：約9.9km、移動時間：自動車約19分、徒歩約2時間29分】

- ・ タクシー：駅に常駐しており、事前予約は不要です。
- ・ コミュニティバス：細久手まで、平日のみ上り 2 便・下り 1 便が運行されています。
- ・ デマンド交通（観光利用）：平日のみ 1 日 3 便運行しています（事前予約が必要です）。
- ・ 路線バス（民間運営バス）：運行されていません。
- ・ その他：特にサービスはありません。

◎ JR 釜戸駅

【大湫まで距離：約 4.8 km、移動時間：自動車約 9 分、徒歩約 1 時間 13 分】

【細久手まで距離：約 11.7 km、移動時間：自動車約 23 分、徒歩約 2 時間 57 分】

- ・ タクシー：駅には常駐しておらず、事前予約が必要です。
- ・ コミュニティバス：大湫まで、平日のみ上り 1 便・下り 1 便が運行されています。
- ・ デマンド交通（観光利用）：運行されていません。
- ・ 路線バス（民間運営バス）：運行されていません。
- ・ その他：民間の宿泊施設による送迎のサービスがあります。

【註】

- （１） 土岐郡は、主として現在の多治見市・土岐市・瑞浪市を範囲とする郡です。但し、多治見市のうち高田地区を除く土岐川以北は可児郡、瑞浪市のうち陶町は恵那郡に属しました。
- （２） 「古代東山道」は、奈良時代から平安時代にかけて用いられた東山道を意味する語として使用しています。なお、当地域におけるルートは明らかではありません。
- （３） 「中世東山道」は、鎌倉時代から戦国時代にかけて用いられた東山道を意味する語として使用しています。
 なお、当地域では中世東山道を「鎌倉街道」と呼称する場合がありますが、鎌倉街道は各地から鎌倉に至る道路の総称であり、この名称は近世になって成立したものとされていることから東山道と同義で用いるのは適切でないと考えられ、本書では使用していません。
 （児玉幸太 編『日本交通史』1992、吉川弘文館）
- （４） 『美濃御坂越記』は安永年間（1772～1780）の書物とされ、当市付近の中世東山道のルートについて「御嶽ー井尻ー宿ー志月ー日吉ー半原ー釜戸ー竹折ー大井」と記載しています。
- （５） 「宿」あるいは「○宿」などの地名は、中世の宿の痕跡である可能性が指摘されています。
 （榎原雅治『中世の東海道をゆく』2008 年、中公新書）
- （６） 織田信長は天正 2 年（1574）年から、本格的な道路整備を開始したことが指摘されています。
 （小和田哲男『戦国の合戦』2008 年、学研新書）